

黒い秋の訪れに

安部孝作

※

階段を上りきって左に進むと突き当たりに工場主の部屋がある。吊り掛けられた金属製の通路が、固い靴底に打ち鳴らされ、高い天井に音を反響させる。扉の窓にはブラインドが掛かっていた。取り込み中のようなだった。一応扉の前で待っていた。手にしている書類が扇風機に煽られている。工場の内部で唸っている機械、軋んでいる歯車や発条、鉄板と銅線の巨塊、この複雑に連絡しあう単細胞生物の群体——反復的に生産される小さな金属の数々と、型違いの系統種の数々——進化の袋小路に突き当たった部品の塊——が発する音は、結局通り沿いの木立で翅を擦りあわせている蝉の声に負けてしまう。噴出する生命は短くとも激しく、哀感の漂う様は遠く北国の詩人の姿を思わせる。食堂で他の工員が話しているのを聞いていた時、昆虫は地球外から飛来した生物だという話を聞いたことがあるが、なかでも蝉は土星の生命体だったという。話していた男は肺を病んでいるような顔色をしていて、以前内装業の会社で働いていた時、石綿をマスクなしで扱っていたというから、実際病んでいるのかもしれない。彼はカレーライスをスプーンですくったまま、ちつとも食わずにしゃべり続けていた。前に座っていた二人の男は相槌こそうってはいるが、話している男の後方にあるテレビを見ていて、ちゃんと聞いているのかどうかはわからない。テレビでは熱中症での死者数が増えていることを報道していた。

手摺に寄りかかり、工場の内部を見渡す。外から差し込む陽射しが影となす境の、波打つ縁が気になって見つめているうちに、感覚の一切が鈍磨して、次第に見ているものを見ているとは思えなくなり、見ているものは見られていることから解放され、人には見せることのない姿を見せ始めているような気がして、明暗の扉が開かれて覗き込もうとする、見えているものには見ることのゆるされぬ世界が足音を立てて——それは甲高い、細いヒールが釘打つ音で……。扉を開けて、一人の女性が出てきた。亜麻色の豊かな髪は緩く巻かれ、気だるげな瞼に切れ長の目、その奥には大きな、漆黒の瞳があった。帽子も服も黒く、その人の肌の白さ、唇と頬の赤さが際立っていた。挨拶を交わす様に一瞬眼が合い、その眼は強く印象に残り、瞳孔の奥から漏れ出していた赤い光が鮮明に思い出される。高貴で知的な雰囲気を漂わせていたのは、服装によるものだろうか、もう何度か眼を合わせたことはあるが、まだその女性のことを何も知らないのだ。誰なのかも、一体工場主とどういう関係なのかも知らない。

ノックを三回して中に入ると工場主は窓際に立ち、背を向けていた。どうやら携帯電話を弄っているようだ。「失礼します」と言うと工場主は漸く気が付いたようで、「お前か。まだ少し外で待ってくれないか」と言う。黙ってまた外へ出て、手摺に寄りかかると、高

いヒールの釘打つ音が下方から聞こえてきた。手摺を乗り出して見下ろすと、切断されて山積みになっている材木の間を、あの女性が歩いている。綺麗な黒の服の通った後は空気が渦を巻き、舞い上がっている黄色い木粉が吸い寄せられている。

ちょうど昼休みのベルが鳴った。このベルの音が、どの機械の発する振動音や軋み、打音に比べて大きい。これもまた蟬と同じく、生命の、その欲求の鳴らす音には違いない。そして警報としても用いられるこの種のベルは、暗鬱と恐怖の入り混じった気分を掻き立てる。それが飢餓感を盛り立てるのだろうか、こうして食欲解放の許可を報せる音として用いられていると思うと、人の欲求の罪深さを覗くような心地になる。仕事に没頭していた工員は顎の先で雫となった汗を拭った。

※

電車がひとつ通るたびにテレビの映像が乱れる。じつと野球中継を眺めていた中年はしかし、何事もないかのように依然テレビに釘付けた。眼の前におかれた気の抜けたビールと冷めた餃子が震えている。蠅が暴れ回り、蜘蛛の巣が撥ねる、埃や木屑が轟音とともに落ちて来る。明治に敷設して以来改修の進んでいない煉瓦造りの高架は、未だに多く残っており、ここ中華料理店〈龍安〉もそうした高架の下で営まれていた。

小さな音量で実況と解説の途切れがちな会話が流れている。厨房の換気扇やボイラーが低く唸り、店主が包丁で固いものを切っている音がする。壊れかけの扇風機が力なく、不器用に風を送っている。そのうち、僅かな慣性に従って数回回転し、そのまま止まってしまふだろう。時が止まったようだった。ここはいつでもそうだった。

下駄の歯が打ち鳴って一人の青年が入ってきた。いつまで経っても日本語が話せない店主が、通訳兼使い走りとして雇っている学生だ。出前から還って来たところで、空いた机に岡持ちを置くと、懐から取り出した蝦蟇口を手に空けてレジに入ると、店主に中国語で何やら話し出した。店主は短い返事をしただけで黙りこみ、仕込みを再開していた。ジヨッキが空いたのもう一杯頼むと、青年は陽気な声で返事をして冷蔵庫から瓶をとり、栓抜きとともに渡した。栓を抜き、ゆっくり注ぐと余り泡が立たなかった。

「最近みえなかったですね」青年は近くに腰かけ灰皿を寄せると、啜えた煙草に火を点け、燐寸を揉み消した。「忙しかったんですか？ 少し疲れた顔してますよ」微笑んでいる青年の声は乾いていて、軽かった。

「どうかな。たしかに忙しかったけれども、それは誰でもそうだろう」そこに蛍光灯に引き寄せられた蟬が一匹、店内に迷い込んできた。青年は箸を取ると、追っ払おうと柄を振り回した。しかし蟬は俊敏に飛び跳ねて、蛍光灯から離れて行こうとしない。

「これが終われば連夜実験レポートです、今夜も。忙しい事には変わらんですけど」青年は上を向きながら、苦しげにそう言った。蟬は一向にとらえられない。

「そうだ、変わりない」

「そうですか？」青年は諦めたように一回腰を下ろし、燻らせた。そしてすぐに、そうだ、と思いついて立ち上がった。「二回電気消してみますね」青年はスイッチを切った。続けざまに蟬を狙って箒を振ると、蟬は軽快に避け、そのまま煌々と光るテレビに引き寄せられ、壁に留まるとじりじり鳴き始めた。

「さて、勘定を頼むよ」ビールを一気に飲み乾し、ポケットから取り出した千円札をカウスターに載せた。「またどうぞ」お釣りを渡しながらそう言った青年の声はやはり、乾いていて、軽かった。

※

灰色の空から不透明な雨がビル群に降るのを眺めていた。窓の前に立っていると、正面遠くにあの看板が目につく。この街を監視するかのような目の描かれた政党看板だ。はがれかけた白塗りの壁に黄色や青、緑に赤で明確な輪郭をもって描かれている。その目は厳かで、憐れむような目つきで常に街を見下ろしている。誰もがあの目を前に、見透かされ、裸にされた気分になる。なにもかも見通す目をもつ者は不幸だ。

今朝は朝食を食べる気にならなかった。医者からは毎朝きちんと摂るようにと言いつけられていたけれども、とにかく今日は食欲がなかったのだ。この雨のせいだ。昨晩のうちから雨はしとしと降り始め、サッシの隙間を抜けて湿気が入りこんでいた。どこか近くのビルの屋上で騒いでいる連中がいた。爆竹が鳴るたびに興奮して上ずった声、鋭い叫び声が響き、三十年も前のダンス・ミュージックをかけて遊び始めた。それから硝子の割れる音が時折して、何時までも終わりそうになかった。紫色のレーザー・ポインタが時折部屋の中に照射され、天井の一点を中心に、部屋の中を霧のように光が行き渡った。まどろむうち、そうした音が昔、自分も学生だったころを思い出させた。しかし、思い出せた事柄は余りに少なく思えた。もう忘れてしまったのかもしれない。疑い始めると穴に落ちるような感覚がした。眠気が強まって来たようだった。

枕に据えられた首が、どうも収まりが悪く、息苦しい。集中出来ずにいるとうとうとはするのだがちっとも寝つけない。そうなると外の音も気になって仕方がない。湿気が皮膚に張り付く。布団の中は蒸し暑くなって、蹴りあげる。五分も経たないうちに布団から脱け出すと、扇風機を着けた。風を浴びていると気分は穏やかさを取り戻した。だが、再び布団に戻るの躊躇われた。ぼうっとするにはあまりに気が昂り、焦りを感じていた。だが一体なにを焦っているのか、何から追われ、何を追っているのかわからない。鬱勃とするさまざまな疑惑を払いのける必要があった。慌ててテレビを点け、リモコンを落とした。暗い部屋の中では少し眩しく、いつもよりも色調が白んでいた。その中で笑顔をつくるアイドルは、普段より数段色鮮やかに見えた。何を話しているかには気がつかず、ただ漠たる気持ちで画面を眺めていた。移り替わるありとあらゆる色、剥がれ落ちた金属片が眼に

降りかかってくる。それは眼球に突き刺さってくるようで、次第に眩しさは痛みに変わった。コカ・コーラのコマージュが真つ赤な映像を点滅させている。テレビの光、蛍光灯の光、こうした光は人類が未だ嘗て体験したことのないほどの刺激をもたらしている、それはもう耐えがたいほどの刺激を——何よりもこの視覚刺激への罪悪感に耐えられなくなる日もそう遠くはないだろう。破片はさらに眼球を突き破って脳にまで達したのか、軽い頭痛がして、そのまま視界が暗転してしまった。

※

工場の中は照明がついていないため真つ暗だった。何かを忘れ物したのか、懐中電灯を頼りに狭い通路を進んで行く。途中ねじを踏んで転倒しそうになったり、台から頭が飛び出していた金鎚に膝をぶつけて痛めたりした。どこかで生き物の気配がして、慌てて灯りを向けると鼠の死骸を啞えた猫がこつちを睨んでいた。いつも歩き回っている工場内の通路も、夜中に懐中電灯一つで歩くと全く違う様に見える。だが確かに、ここはいつもの工場ではないという気がしてくる。周囲をぐるぐると照らし出すと、本来スイッチのある場所に禁煙ポスターが貼ってあったり、機械の塗装の色が変わっていたりする。

コンベアの上にはなぜかマネキンの首や上体、腕や足がばらばらになって並んでいる。近づいて手に取ってみるとまだ温かかった。精巧にできていて、質感も人の皮膚とそっくりだし、この顔も見たことがあるようだ。誰の顔が思い出せずにいると、ブザーが鳴ってコンベアが動き始めた。あちこちの歯車が動き始め、モーターが呻吟している。コンベアにはいくつもマネキンが乗っていて、次々と目の前を流れてゆく。こんな時間に誰が機械を動かしているのかと思ひ、階段を上がって回廊を進んでいく。ところが、いつもの通り歩いてても機械室に辿りつかない。真つ暗な工場の中をいくら歩いても同じ場所を行ったり来たりしているようだった。

やがて疲れてしまい、欄干に寄りかかった、その時、——肘が金属の棒に触れる感触がない——慌てて脇に視線をやると、そこに欄干はなく、下方に幾百もの大きな歯車が複雑にかみ合っている機械の内臓が露わになっていた。だが重力は質量を見誤ったのか、それとも特殊な気体が身を包んでいたのか、紙切れが高所からひらひらと舞い落ちる様に、この身体もひらひらと落ちて行った。そして静かに機械の上にかぶさっていくと、駆動している歯車は熱を持っていて、首筋や太腿を酷く火傷した。続けざまに服が剥ぎ取られ、毛髪を塗り取られ、指を切断され、皮膚が引っ張られたと思ったら、そのまま肉が少しずつ歯車の奥へと、骨と共に細かく砕かれながら消えて行った。手足の一本一本、肋骨の一本一本潰されていった。その間、悲鳴をあげることなく自分が落ちてきた通路をじつと睨んでいた。そこに誰かの人影を感じたからだ。誰かがそこから見ていると思ったのだ。

※

肩を叩かれて酷く驚いてしまった。大袈裟な動作を伴って飛び起きると、爪先に掛かっていたコードを引っ張ってしまい、卓上照明が転倒するとともにペン立てが床に落ちた。何本もののペンが散乱したが、そばにいた同僚が急いで掻き集めてくれた。その同僚はちょうどシュレッダーで不要になった書類を処分していた。振り向くと工場主が眉を顰めて立っていた。

「昼休みはもう終わったよ」そう言って書類の挟み込まれた一冊のファイルを差し出した。

「すみません、今取り掛かります」

「居眠りなんて珍しい。顔色も悪いが、寝不足なのか」

「大したことはありません」

「夜更かしもほどほどにするといい。そのうち本当に眠れなくなってしまう。そうだ、後でちよつと来なさい。大事な話があるのだった」

工場主は励ますように背中を軽く叩いて事務室から出て行った。ペン立てを直してくれた同僚に「ありがとう」とだけ言って、早速仕事に取り掛かった。二時間ほど集中したところ、挟まれていた新たな帳簿と在庫リストの計算はほとんど終わった。途中コーヒーを淹れに給湯室へ立ったが、その時女性の同僚三人が工場主について噂をしていた。どうやら不倫をしているような気がするの、と一人が言うと、もう一人が、ああ、と納得したように相槌を打った。最近電話口でもめているのが聞こえてきてね、見ると工場主だったんだけど、どうやら相手は奥さんだったと思うの、と根拠を添えた。するともう一人が、ねえ、あの人見たことある？ 時々工場主の部屋に入入りしている、お金持ちそうな女、と訊くと、さつきまで黙って紅茶を啜っていた一人が、あるよ、と答えた。あの人とても綺麗ね、でも多分不倫じゃない気がする、と落ち着いた声で言うと、後の二人は少し醒めたようで、何もその人と不倫しているとは言っていないわよ、と言って、再び噂話を続けた。黙っている一人は、なにか物思いにふけるような面差しで相変わらず紅茶を啜っている。

コーヒーを淹れて一息つくつと、残り少しの仕事を仕上げた工場主の部屋に向かった。昼間でも証明がなければ薄暗い工場の中を、いつも通り進んで行く。工場が急に変わることはないのだから、それで迷うこともない。時々見る禁煙ポスターも、夢で見たものとはデザインが異なっている。しかし見慣れているにも関わらず、きよるきよる見渡して歩いていると、急にこの場に自分が馴染まないように感じられる。初めて訪れた土地で感じる緊張感が胸を撃った。その時、——足元が不覚だった——転がっていたねじを踏みつけてしまい、滑って転んでしまった。傍にいた工員が大丈夫ですか、と抱えて起こしてくれたが、暫く呆然としていた。すると不注意は重なり、台から飛び出していた金鎚に膝をぶつけて痛めてしまった。やがて階段に差しかかった。鉄板を撃つ音が何重にも響く。

そのうち踊り場から階段に足を掛けてすぐ、誰かに呼び止められた気がして踏みとどまって振り返った。壁には姿見が掛かっており、自分の背中と驚いたような横顔が映っている。映っている自分の姿は、普段自分が思っているよりも人間らしくないと思った。そこ

で立っている自分は石像のように固く、無表情で、現実が存在する自分よりも、より存在しているようだった。そして本物でありながら霞のような存在しか持っていない自分に対して、その質量をもった存在は威厳を発してさえいるようだ。その座を譲り渡せと、今にも本物の自分を追放してしまおうだった。実際彼がぎよっとして硬直していたのは一瞬で、彼の視界から虚像が消えるのと同じくして、前方を見、階段を上り始めていた。だが背中には、いまだに消えない虚像の気配が漂っていた。

※

窓からは強い日差しがさして、思わず手を翳すほどだった。逆光で窓際に立っている人も黒い影だけになっている。その影の周りを碎けた蜻蛉玉が万華鏡のように様々な形を作り出している。その影は丸みを帯びた曲線で縁取られ、肉体の古典的な美しさを露わにしていた。恐怖のあまり混乱しながらも陶然とし、激しい頭痛と吐気に襲われながらも、目眩の浮遊感に肉体を忘れる快楽を覚えていた。その場で倒れ込み、そのまま横になっていると、どこからか工場主の呼びかける声があった。そして日光が突然弱くなり、室内は真っ暗になった。

「大丈夫か。痙攣してるぞ。一体どうしたんだ」そう言いながら工場主はカーテンを引いているようだった。「私がいないうちに何があったんだ。勝手に入ったことはともかく、どうして倒れていたんだ」工場主が駆け付けて抱き起してくれた。そして肩を組んでソファまで運ぶと、暫く横になっているといい。寝不足で疲れているんだろう」

そうして誰かが蛍光灯のスイッチを入れる音がした。この時視界がまたも暗転したことに気が付いた。真っ暗で何も見えない中、忙しなく動き回る足音が一つ聞こえていた。そして微かに煙草の臭いが染みついたソファの上で横になっていると、誰かが扉をノックする音がした。工場主が扉に近寄り誰が来たのか確認したのか、僅かに間を置いて「どうぞ」と、扉を自ら開けた。

「お待ちしていました、どうぞかけてください」

工場主のその声の後に聞こえてきたのは、あの細いヒールの釘打つ音だった。あの人がまた工場主を訪れている、そう思うと腹の裡がむずむずとして、僅かばかり痛みが感じられた。あの眼の赤い輝きを思い出した。眼も見えず、声も出せず、力が入らず身動きもままならないため、まるで捕縛されているようだった。

「どうやらあなたがいらっしゃる時は晴れと決まっていますね。今朝はまだ驟雨が止まずにいて、雲がどんよりとかかっていたのですが、今ではこんなに晴れて、空は真っ青ときた。太陽に愛されているでしょう」

「それなら廷臣の雲にもござって歓迎してほしいくらいです。出かける度こんなに暑くては、偉丈夫のあなたのような人でも身が持ちません。そうじゃないかしら」

「全くです。こうして屋内にいないと、肉体はもとより、頭蓋骨まで溶けてしまいます」

「冗漫な挨拶はここまでにして——」

「ちょっと待ってください」

工場主はそこでいったん口を噤み、ソファへ歩み寄ると、ひっそりとした背中に向かつて「そろそろ起きられないか」と訊いた。しかしまだ口もきけないため、返事と言えば規則的に整った、寢息のように細い吐息だけだった。

「その方は——」

「さっき部屋に戻ってきたら床で倒れておりましてね。いやはや、困った部下です。最近眠れていないらしくて、恐らく疲れていたんでしょう。直によくなります。そうしたら出て行ってもらいますから」

「その必要はありません。いずれその方も招かれることになるのですから。とにかく始めましょう」訪れてきた女がそういうと、室内は沈黙が支配し、外から聞こえる工場の操業する騒音や蟬の鳴き声が浸入してくるばかりになった、その中で、わずかに衣の擦れる音が聞こえていた。その脇でどうにか耳を閉ざそうと思ひ、首を動かそうと上半身を揺らしていた。やがてバランスを崩してソファから転落し、床の上を虫のように這いつくばり、自力で部屋から出ることができた。扉の前で息を吐くと、すっかり草臥れてしまって、そのまま眠りこけてしまった。

※

電飾に照らされた看板、ネオンが点滅する看板、一字光つては消え、波を打つ電気の海に日が沈もうとしていた。再び雨の降り始めた空は、灰がかった紫に染まった。電車は高層ビルの間を縫って敷設された線路の上を黙々と走っていく。遠くに見慣れた政党看板の巨大な眼が見える。海中にひとつ聳える奇岩のような影をしている。今日は生憎雨に濡れ、その瞳は曇っているようだった。薄暗く蒸し暑い、こういう天気の時には犯罪が増えるようだ。高架の下に川を挟んで延々と続く住宅街と、その間の路地を細かく見ていると、帰宅途中の車や、傘を差して走り抜ける自転車の中に、不審な歩行者を見つけたりする。そして一分ほど経った距離の団地前にパトカーが停まっていたりする。遠くで煙が立っていると思うと、手前で消防車が路上駐車車で立ち往生している。塀から飛び降りる猫が見えると、川に浮かんだ猫の死骸が目につく。橋の上から川を眺めている人の、瞳に映る反転した世界まで見える気がする。

自宅の最寄り駅より三つ手前の駅は、乗換駅になっていて、多くの人が乗り降りする。ある程度の人々がまとまって入れ替わると、なぜだか車内の空気も一変する。しかしいったい誰がこの社内の空気を支配していたのだろうか。特殊な緊張感を作り出すのがうまい人がある。こうした人物は極めて巧妙に議論を支配したり、場の決定権を握ったりするが、決まって口数が少ないために、誰からも気づかれることはない。口数の多いものは物事が決まってしまうから、選ばれた過去がどうしてそうだったのか理解できずに戸惑う。自分が話す

ことに夢中で何も見ていないからだ。そして自分の意見を出せば出すほど議論を誘引できていると思ひ込む。勿論できていることもある。しかしできる場合ですら、周りの人物も同様の思い込みに掛かっているにすぎないのだ。こうした寡黙な支配者が、街の中にも現れる時、より注意深いものは慎重に見守らなければならない。

暫く電車に揺られ、いつも通りの駅で降りた。そして改札口の前で定期券をポケットから抜き出そうとした時、一枚の紙片がひらりと飛び出して来た。慌てて立ち止まり、拾い上げると、それは一枚の写真だった。乗り込む時にすらその存在にも一切気が付かなかった。後ろから人が来るので、とりあえず再度ポケットにしまい、改札を抜けた。それから傘を差す一群を避ける様に沿線を歩いていく。

〈龍安〉の前まで歩いているうち、雨は小止みになり、虫の音が聞こえてくるほどになった。晩夏の涼しい夕風が穏やかに吹いている。月の見えない夜闇の中、赤い看板がけばけばしく光っている、その下にあの青年は卓を運び出しているところだった。声を掛けるといつも通りの陽気さで返事をした。どうして卓を出しているのか聞くと、時間が停まったようでは、どうも息が詰まるからだという。それなら、と言って椅子に腰かけ、ビールとラーメンを注文した。ガラス戸越しに見える店内は、確かに何一つ変わらない。壁紙やポスターは、酸化した油で薄ら黒ずんでいたが、その色もそれ以上変化することもなさそうだった。古びて劣化した蛍光灯とテレビは色褪せた光を煌々と発している。今日は演歌のヒットパレードが放送されていた。この店主は日本語がわからないが、演歌はわかるのだろうか。常連の中年がカウンターに肘を立て、餃子とビールを前に据え今日もぼうつとテレビを見ていた。この間から全く動いていないのではないかと思った。更に一人、座敷に座って雑誌を読みながら炒飯と酢豚を食べている若い男が一人いた。

ビールが運ばれてきた。青年はそのまま煙草に火を点し、うっすらと灰がかった黒い空を眺めていた。一口飲み、写真を取り出す。その写真には白黒の絵と、カラージュされた女性の顔が写っていた。天使のように翼を生やした巻き髪の間人が、頬杖を突き何かを書いていて、その後背には十六の数字が区切られた正方形に並んでいる、前歩には筋張った子牛や子供がいて、天が啓けている。鉛で描いたような色だ。女性の顔は、間違いなく工場主の愛人と思われるあの女性だった。裏書には電話番号が端正な字で記されていた。

※

家の中は蒸されていて、人肌の面を漂う空気のようなだった。今さっきまで誰かがいたような気がする。いや、人のいない家に戻ると、この蒸し暑さがより一層一人であることを身に染みて実感させるといものだろうが……しかし——カラン、と台所の方から音がした。やはり人がいる、そう確信して、足音を忍ばせ台所へ行くと、シンクの中に積み上げてあったビールの空き缶が一つ転がっていた。蛇口が緩んでいて水が一滴一滴垂れている。どれだけ強く締めても漏れてくるため、もう諦めている。

服を脱ぐと汗が冷える。シャワーの蛇口をひねる。数分して湯気が立ち始め、首元から流れ落ちる湯が浴槽を濡らす。夏なのに体の芯は冷えていることに気が付く。頭から湯を被っていると次第に冷え切った繊維がほぐれ始め、何度か体が震えた。息ができなくなるまでシャワーを顔に当てた。溜まったお湯の中に座りこみ、膝を抱えた。このまま何分もぼうつと何も考えずにいられるなら、そうしなかった。だが落ち着かない。一分と同じ姿勢を維持し続けることが困難に思えた。あの女と眼の合った瞬間が繰り返し現れる。現れる度に、なにかを伝えようとしているような、あるいは誘いかけているような気がしてならない。本当に工場主の愛人なのだろうか。勤め先で逢瀬を重ねるとは工場主もなかなか大胆ではないか。常々苛立ちを感じさせられる、人徳を給与明細に記された数字と比例させるような、小市民的な勤め人とは違うのだろうか。しかし、あれほどに綺麗な女性を愛人とする可能性などあるのだろうか。自信のない男ほど綺麗な女性を手に入れたがると聞く。ならばあののような女性を愛人とすることこそ、卑屈な自信を隠し持つ小市民的な勤め人であることを示しているのではあるまいか。マルクスが自らの富で自らを美化できると皮肉を言ったように。とはいえ、自信のなさを自覚すればするほど、美しい女性との、淵のような隔たりを感じるものだが……。

しかしなぜポケットにあの写真を忍びこませたのだろうか……電話をしてみようか、どうしようか……どうするのか……風呂場の照明はどうしてこうも暗いのだろう……顔を思い浮かべていると、自分でも気づかぬうちに鼻歌を歌い、その歌がどこから聞こえてくるのかわからなくなった。空からだろうか……遙か上方より聞こえてくるようだが。そう思い見上げると結露する天井から水滴が落ちてきた。汗の滲む顔を湯で漱いだ。立ち上がり再度シャワーを浴び、タオルを取った。台所へ行き、水を一杯飲み、ベッドに入るが眠気はやはり来ないようだった。火照った体から汗が垂れている。窓の隙間から緩やかに入ってくる冷涼な空気が繰り返し押し寄せてきた。テレビをつけようとりモコンに手を伸ばした。どこかで爆竹が鳴った。

※

工場に戻ってきたら既に真っ暗だった。沈みかけの太陽が薄明りを東に向かって投げかけているが、通勤に慣れた並木道には人気がない。幅の広い歯に、灰色の光が照りつけている。この時間なら帰宅者が歩いていたり、自転車をこいでいたりするものだが。そう思った途端、なぜ自分があちらの空を東と思っただのか、根拠がないように思われた。もしかして明け染めの時間なのかもしれない。日差しは東から西に浸みていき、白骨のような月が浮いているのは南東の空だ。雲一つなく澄み切っていて、落ちて行きそうだ。それにしても自分は何を思っただけで来たのだったか。何か忘れ物をしたように思える。

鉄門の鍵は開いていた。トラックが数台停まっているだけの駐車場は、いつにもまして広々とし、空虚に思えた。遠くで名も知れない鳥が単調に啼いているのが良く響く。ゆっ

たりとした足取りが、啼き声とずれたテンポのまま合うことがない。入り口は陽に背を向けて陰になっていた。足元には綿毛になった蒲公英が寒そうにじっとして居る。中に入り、照明のスイッチを押したが何も起きず、そばに備え付けられていた懐中電灯を手取る。両側から鋼鉄の巨体が圧倒している、狭い通路を小さな灯りを頼って歩いていると、転がっていたねじを踏んで転倒しそうになったり、開けっ放しになっていた抽斗で膝を打ったり、肘をぶつけて金鎚を床に落としてしまったりした。危うく足の上に落ちて来るところだった。拾い上げる時、陰で腹を向けて眠っている蟬がいた。いや、眠っているのではなく死んでいるのか。啼き疲れてその姿は、すっかり抜け殻のようだった。その乾いた背中を破って、再び新たな生命体が飛び出してくるかもしれない。

そのうち階段に突き当たり、見上げると工場主の部屋に電気が点いている。誰かがそこで待つてくれているような気がして、迷わず足を掛けた。一段一段金属板が踵に打たれて響く。登りきって左に進み、窓にブラインドの下がった扉を敲く。すると一人の男が出てくる。夜会服を着ていて、油で丁寧になでつけた髪が硬質な光を放っている。口髭を揺らしながらこういう。「招待状をお持ちでしょうか」。一瞬何のことかわからなかったが、その表情を読み取ったのか、指で四角つくり、あの写真のことだと示唆した。この時、忘れ物をしているという漠然とした感覚が明瞭なものに変わった。どのポケットを探っても、あの写真はなかった。忘れたようです、と言うよりも先に、その挙動を見た男は、整えられた口髭を指で撫で、眉を顰めると扉の向こうに消えてしまった。するとあの赤い耀きを宿した両目が脳裏を過り、何か取り返しのつかないことをしたように思い、焦って扉のノブを掴むなり、回して押し込んだ——が、忽ち手ごたえと共に扉は消えてしまい、先ほどまで沈黙が支配していた工場に突如鳴り響く機械音が、そして数多の刃が肉体を包み込んだ。八つ裂きにされていく間、見上げていた両の眼は最後に扉が開かれるのを目撃し、闇を呑みこんだ。

※

海岸線を走り、電車は南西へ向かう。崖壁は岩がむき出しになり、黒っぽい苔が点々と生えていた。線路沿いには、瘦せた灌木や、短く密生した雑草がだらしなく葉を広げ、青い花が咲いている。うっすらと曖昧な色の空の下には、黒い海が穏やかに波打ち、水平線は墨で引かれたようだった。昨晚乗り換えたこの寝台車は、過ぎてゆく夏の、冷涼な潮風を静かに切り裂いていた。

工場主はいつになく温情的な態度を取っていた。昨日は遅刻をし、昼休みのベルが鳴る頃に漸く工場に着いたのだった。そして経理部の事務室を開く。冷房が反って首筋から汗を噴き出させた。昼食を摂りに殆どが出払っていた。そこに電話が鳴り、慌てて受話器を取ると工場主が部屋へきなさいと言っている。振り返ってL字型の回廊を斜に眺めると、工場主が部屋から手招きをしている。今行きます、と言って部屋を後にした。遅刻したこ

とを咎められると覚悟をした。ところが、部屋に入ると開口一番に体調はどうかと訊かれた。答えあぐねて視線が定まらなくなったが、幸いにも工場主が先に切り出した。「暫く休養を取った方がいい」と、一か月の休みを与えられた。「一か月もよろしいのですか？」と訊くと、工場主は柔和な笑みを浮かべて首肯した。顎には白い鬚が生えていた。

その日はそのまま一旦帰宅し、荷造りをした。出発する時、寝室の棚に無造作に置かれていた写真が目についた。それをポケットに押し込むと、鍵を手中で振りつつ家を出た。普段用いている電車に乗るのは止め、地下鉄で中央駅まで向かった。階段を下りていくと、地下道は湿気と臭いで充満していた。あちこちに落書きと吸い殻の詰まった空き缶が目立ち、いくらかの商店はシャッターを下ろしたままだ。多くの人が往来するにも関わらず、足音ばかりが目立つ。改札を通り、更に階段を下りて電車を待つ。天井から漏れてきた地下水の水溜まりが足元に広がり、蛍光灯を反射させている。

陽は傾き、中央駅は街を外れていく電車を待つ人で一杯だった。郊外の住宅街や、市や県をまたいでベッドタウンへと帰っていくのだ。車窓を覗いてみると、住宅やビルは絨毯のように山陰の手前まで広がり続ける。帰宅する人々で満ちた電車の中で、自分も同じ方向を向いているにもかかわらず、自分はどこへ向かっているのか、確信が持てなかった。彼らの顔には疲れが見えるようだった。車窓に薄く映る自分の顔には、何が見えるのだろうか。私は携帯してきた文庫本を広げたが、一向に集中できず、夜が沈み込んでくる外を何度も瞥見していた。そして一駅毎に下りていく人たちの背中を見つめていた。

寝台車の乗換駅に到着し、重い旅鞆を提げて電車を降りた。扉が閉まり、目の前をぬつと進んで行く電車と、窓から見える人の影をぼうつと見ていた。既に辺りは真つ暗で、照明の下に虫が集っていた。その虫を捕食しに、蝙蝠も飛んでいた。ベンチには小さな甲虫が何匹も這っていて、座る気になれなかった。幸い待合室があつて、中に入る。先に五人の男女が座っていた。正面には同じく旅行だろうと思われる中年の夫婦が会話もなく座っている。夫は週刊誌をじっくり読んでいた。妻はうとうとしていた。その左横には女が一人足を組んで座っていて、イヤフォンをして携帯電話をいじっている。その正面には、若い恋人たちが白けたように座っている。男は待合室に飾られた風景写真を眺めていたし、女は所在なさげに視線を落ち着かせなかった。手を見つめたり、誰かを見たりして、時折目が合うことさえあつた。自分もまた所在なかったのだ。時計を見ると寝台車が到着するまで一時間弱あつた。中年の男が咳払いをすると、その左の女が足を組み替え、低いヒールが床に当たって音を立てた。

※